たどつのむかし

Vol.4(H25.3.22)

「多度津金毘羅街道」

金毘羅参りは江戸時代、特に文化文政期(1804～1829 年)や天保期(1830～1844 年)などの江戸時代後期(18世紀後半～)に盛んに行われるようになりました。当時の町人文化が成熟していく段階で、神社仏閣への参詣というものが、遠方へと足を運ぶことの少ない庶民の楽しみの一つとして採用されるようになってきたのでしょう。参拝者の多くが、大坂から備前を経由して、あるいは西廻り廻船のルートに沿って北日本、山陰、九州、広島などから船で多度津港に入り(図 1)、そこから歩いての金毘羅参りとなります。当時の参詣のなかで港からほぼ南に直進するルートは3つあり、丸亀、宇多津、そしてこの多度津があります。金毘羅参詣名所図会には多度津のことを『此津は丸亀に続きて繁昌の地なり。原来波塘の構よく入船の便利よきが故に湊に船夥し(多度津は堤の構え方がもとからよいため、入港しやすく、港の中にはたくさんの船が入ってきています。そのため丸亀に続いて繁盛しています。)』と記されています。古くから讃岐の交易の玄関口の一つであった多度津は信仰の対象への入り口としても利用されていたということになります

図1 多度津の湊　参詣船入津の図

多度津金毘羅街道の町内のルート(図2)は多度津の港「ふなば」から須賀金毘羅社を横目に南下し、現在も古い街並みが残っている本通り商店街を進み、桜川に達します。すぐ西側に架かる鶴橋を渡ると、一の鳥居(図3:現在は桃陵公園に移設されています)が現れます。そこをまっすぐ南下していき、多度津中学校の東側を通り、西側に天霧山を見ながら、三井の八幡宮に差し掛かるところで東に少し曲がり、八幡宮の参道沿いにさらに南下し、善通寺市に入ると、今は基底部しか残っていませんが、二の鳥居跡へとつながります。

図2　多度津町内の金毘羅街道

街道の道沿いには道しるべとなる道標や常夜灯である金毘羅燈籠(図4)などの石造物がいくつも設置されています。当時は今のように多くの建物はなく、夜道も今ほど明るいわけではなかったので、これらの石造物で参詣ルートの確認や、暗くなった時の街灯として利用されていました。特に燈籠には雲州(島根県)や防州(山口県)、芸州(広島県)や予州(愛媛県)などの寄進者(寺院や神社などに土地や金銭などを寄付した人)が刻まれており、周辺地域から金毘羅参りを厚く信仰しているあかし、そして寄進する職種によってはある種のコマーシャル手段(「○○の国の○○屋さんは燈籠を寄進するほど信心深い」というようなイメージ戦略)として、石造物が奉献されていったようです。多くは本来設置されていた場所から移動しているものもありますが、現在も残るこれらの石造物が、当時の街道の様子を思い起こさせるモニュメントとなっています。

図3 金毘羅鳥居

図4 金毘羅燈籠

多度津町教育委員会